



Title	広報活動の客観的評価方法に関する研究：企業メッセージの定量分析による広報の表現力の測定〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	須田, 比奈子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第12286号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61507
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hinako_Suda_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：須田 比奈子

審査委員	主査	教授	伊藤	直哉
	副査	教授	山田	澤明
	副査	准教授	辻本	篤

学位論文題名

広報活動の客観的評価方法に関する研究

—企業メッセージの定量分析による広報の表現力の測定—

本論考は、ネット上に公開されている企業リリースによる広報活動を定量的に分析し、広報活動の組織への貢献を評価することを目指している。その際、本研究では組織の目標達成をどのように広報が支援するかという観点を評価基準の中に取り入れ、部分的ではあるが、評価方法論として実現させているという特徴を有している。具体的には、組織内外のステークホルダー間での組織価値観の共有を促進することを広報の重要な機能と捉え、その機能の実現の程度を測定するための指標を開発し、2つの検証によってその有用性を確認している。組織価値観を対外的メッセージで表現している程度を分析することにより、広報部門による継続的な活動の取り組み、メッセージ配信における部門間の連携、組織価値観の共有促進、及び共有促進によるレピュテーション強化への貢献等、一連の帰結が示唆され、検証されている。

本研究の位置付けを学問的に概観すれば、2000年前後に米国エクセレンス学派が到達した広報評価に関する未到達課題に対し、ネット上の活動という領域的限定性は存在するものの、定量分析の手法開発とともに、未到達課題解決に半歩前進を行った貢献を有している論考といえよう。本論考の審査過程において、以下の質疑及び議論が展開したので、ここにまとめておく。

まず指摘されたのは、本論考の際立って高い方法論的な緻密さ、統計的手法や分析信頼性の高さである。本論考の筆者は、2011年東日本大震災発生直後より発足した震災リスクプロジェクトの創設メンバーの1人であり、本プロジェクト以降、徹底した統計的分析手法に研鑽を積み、その結果を博士論文で十二分に発揮している点が高く評価された。その一方、高い信頼性に対して研究課題に関しての方法論妥当性に関し、今後の改良の余地があるとの指摘があり、今後将来的研究継続の中で、

少しずつ妥当性の向上に努めて行きたい旨、論文筆者より解答があり、審査委員会は了承した。

引き続き、本論考が扱っている研究射程に関する議論も行われている。本来の企業が行っている一般的広報活動領域に対して、本論考が射程としている広報活動領域はどの程度網羅されているのか、あるいは本来の広報活動に対してどのような領域的特性を有しているのかという点である。本論考の研究対象素材は、ネット上より得られており、その限りにおいて企業の広報活動はネット上の広報活動評価に限定される可能性もあり、本論考が明らかにした評価方法による企業評価は、全体から見てどの領域における評価であり、更にはこの評価はどのような特性を有しているのかが議論された。本議論に関して論文執筆者よりの確かな説明があり、今後、実際の広報担当者とのインタビュー等を活用しながら、より広い射程での広報活動評価を行っていききたい旨の発言があり、審査委員会は納得した。

本研究の後半部分では、本研究の評価結果とレピュテーションの関係も言及されており、本研究におけるレピュテーションに関する研究成果を巡り、幾つかの点で議論が行われた。近年の広報実務がブランドからレピュテーションに向けてシフトしている実情もあり、レピュテーション研究の重要性も増大している事実を背景に、本研究とレピュテーション研究の関係も今後の大きな研究進展可能性の一つであることが本論考執筆者より述べられ、審査委員会は了承した。

本研究の特徴を概観すれば、極めて高度な統計的手法を駆使し、高い論文としての信頼性をもとに、未解決の広報課題を確実に半歩前進させた高い学問的貢献と意義が上げられる。本研究に先立ち、本論考執筆者は複数の論文を既に国内外の学会で発表し、学会賞を含めた高い評価を得ている。今後の更なる研究継続により、広報学の学問領域に新たな研究の方向性と可能性を構築することが期待される旨、審査委員会より総評された。本論考執筆者の将来的研究に対しては、激励と熱い期待が述べられた。

以上の審査結果をもとに、本論考に対して本審査委員会は慎重な議論と検討を行った結果、本研究の学問的意義及び論文としての価値は十二分に高いものと判断した。そこで、本審査委員会は、本研究を北海道大学博士（国際広報メディア学）に相応しい学術論文であることを全会一致でここに認め、その結果をここに報告するものであります。